

ここから これから

NPO 法人 北海道 NPO サポートセンター
2021年9月号 [季刊発行]

Vol.
2



からから 便り



2つのちいさな集いの場

～オンライン座談会のご報告～

ことばに残る故郷の文化

北海道の方言

おなかとこころのよりどころ

移住者お店探訪

1ページのたより

ここから これから からから相談

相談先のない相談

北海道における被災避難者の受入状況

編集後記

2つのちいさな集いの場

～オンライン座談会のご報告～

今年の5月と6月に行ったオンライン座談会には、5名の方が参加され、両方とも時間いっぱいお話が続きました。今回は、5月に開催した「子どもの不登校どうしてる？」のゲストアドバイザー相馬契太さんのお話から、同じ悩みを持つ方々と共有したいお話をピックアップしてお伝えします。

▶ コロナ禍で感じること

「中学校の相談室にいて思うのは、コロナ禍でも、4月になってやる気を出していた子どもたちが、蔓延防止、緊急事態宣言と社会状況が変わり、出鼻を挫かれてしまったように感じています。子どもにとって、先の見えない状況というのはとても負担がかかります(相馬さん)」。親御さんからも、学校の支援室(不登校の子どもたちが週に数回通う教室)に来る子どもの数が今年度に入って増えた、というお話がありました。

▶ 学校での子どもの居場所

今、学校では、一人1台のタブレットが使えるようになってきていますが、不登校の子どもが通う支援室にWi-Fi環境がないため使えない学校もあります。また、「図書室で本を読みたい、借りたい」と思った時にできるかどうかは、親御さんのお話からも「学校によってさまざま」なのが現状のようです。「不登校の子どもたちもその学校の生徒であることに変わりはないので、本来、学校の

備品や図書室、美術室、体育館などももっと自由に使えていいはずなんです。学校の中に、教室に入れない子どもたちが行ける場所をどれくらい増やせるか、ということは大事なことだと思っています(相馬さん)」

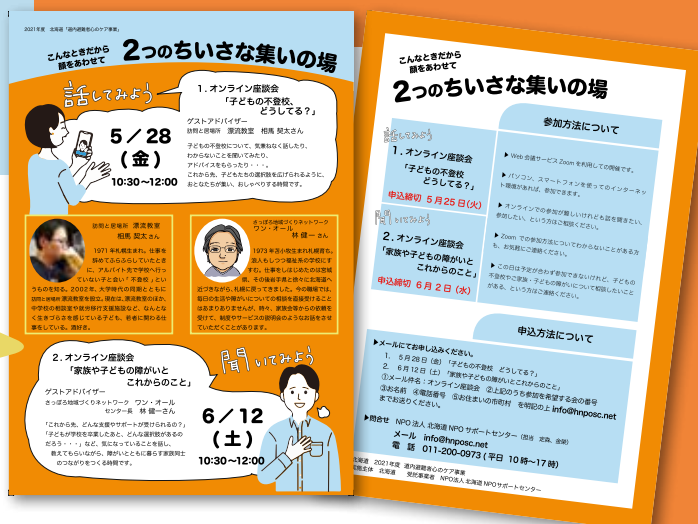
▶ 日常の子どもの居場所

親御さんにとって、学校へ行かないことでの勉強の遅れはやはり気になるところ。今後、オンライン学習などの仕組みが整い、自宅でリアルタイムで授業を受けられるようになる日も来るかもしれませんが、それにも良い悪しがあるようです。「勉強したい!という子どもには良いかもしれませんが、家まで学校の領分がやってきてしまえば、子どもたちの居場所がなくなってしまう。だから、使いたい時に使える、使いたくない時は拒否できる、という選択を残すのは大事だと思っています。学校の様子が全然わからないのも子どもたちにとって不安なことなので、『どんなことをやっていたのかな』と、ちょっと離れたところから安全に確認できるツールとしての良さはあります(相馬さん)」

▶ ふだん使う言葉の大切さ

最後に、相馬さんからはこんなお話がありました。「今日、皆さんの話を聞いていると、『学校に行けなくなった』『教室に入れない』という『～できない』という言葉づかいになりがちです。本人もそう思っているとしても、否定の言葉は自分自身を落ち込ませてしまいます。そういう時、北海道弁を使うといいと思います。『学校に行かさってない』『教室に入らさらない』、行けた時は『学校に行かさった』くらいの感じにしておくのと、誰のせいでもなく、行ったり行かなかったりしているんだな、ということになります。日常的に使っている言葉はとても大事で、気づかぬうちに言葉に影響を受けてしまうので、否定的な言葉を減らすだけでもちょっと変わるんじゃないかな」

オンライン座談会「子どもの不登校どうしてる?」は、またの開催を約束して、この日は終了となりました。今回参加できなかった方、お子さんの不登校のことで悩んでいる方は、気兼ねなくご連絡ください。



相馬契太さんが学生時代の友人とともに2002年に立ち上げた「訪問と居場所 漂流教室」での活動は大きく2つ。1つは、「家からなかなか出づらいなあ」という子どものところに週に一度1時間訪問する、もう1つは「学校にいきたくないな」、「(学校に限らず)どこか行く場所欲しいな」という人が自由に来られる居場所の運営です。また、相馬さんは漂流教室を運営する傍ら、NPO法人北海道フリースクール等ネットワークの代表、2012年からは札幌市の中学校で相談支援パートナーを務めています。



「訪問と居場所 漂流教室」

open 火曜日～金曜日 9:00-18:00
札幌市中央区南8条西2丁目5-74
市民活動プラザ星園 401
電話 050-3544-6448
メール hyouryu@utopia.ocn.ne.jp

いんでないかい

したっけね

ちよす

わや!

ばくって!

なまら

めんこい

ことばに残る故郷の文化 北海道の方言

開拓時代、屯田兵や単独移民たちは、ひとつの集落に全国各地から来た人々と暮らすことになり、ことば(方言)の違いは生活を成り立たせる上で大きな壁となりました。そこで人々は、意思の疎通ができることばを求め合い、共通語化がいちじるしく進んだ、と言われています*。

とはいえ、北海道マップ 179「北海道の方言」版をみると、各地の方言が「北海道の方言」として引き継がれ、定着していることばもありません。

さて、この中に、みなさんの故郷の方言と同じことばはありますか？

*1 参考：北海道ウエブサイト「北の生活文化(北海道ことばの現在)」
*2 (NPO)法人日本自治ACADEMY 制作

体験談

北海道に来て、テレビのインタビューなどで北海道の地方のおじさん達が話している言葉を聞いたとき、標準語で話していることに少し驚きました。東北に暮らしていると、テレビに映る地方のおじさん達は、皆、訛っているものだったから、それが当たり前の感覚になっていたのです。だから、ちよっと

不思議な感じでした。あとで、北海道の言葉は共通語的で、標準語で話す人が多いのだと知りました。

とはいえ、10年住んだ今でも、たまに「ん？」と思う言葉に出会います。子どもにも関わる仕事をしている時、「もうつつぺとっていい？」と子どもに声をかけられました。「え？つつぺってなに？」と戸惑っている

と、その子は続けて、「もう鼻血止まったよ！」というので、鼻の詰める物のことだと気づいたのですが、まさか、詰め物に名前があるとは…。

「それじゃあ、つつぺのことなんて言っの？」と聞かれたら、「ティッシュとか脱脂綿とか、詰めているものの名称」と答えます。

そして、気になる助動詞「〜さる。〜らさる。食べらさる。押ささる。書かさる…」など。

「書かさった」と言われると、自分で書いたのにペンが勝手に書いたみたい、自分の意志とは違うところ、でそうなったように聞こえて、違和感だらけ。「それって、自分でしたことだよ」と、かなり戸惑ったも



のです。でも、日常的に聞いていると、「〜らさる」で話すことで、たとえばケアレスミスを許す寛容さのような、なんとも不思議な感覚にさせられます。そして慣れてくると、この言葉はとても便利で都合がいい。美味しくついでに食べ過ぎてしまう北海道野菜。「美味しすぎて食べらさる」。うん、こういうときに使

たいことばです。一方、「北海道の方言」にある「いずい」「うるかす」「ちよす」「なげる」などは、地元でなじみの言葉で、「北海道の方言」として知るまで、そもそも方言だったことを知らずに使

いた。東北から開拓に入った人たちが使っていた言葉が現代につながっているのだなあ、と実感します。

え!この方言、北海道以外でも通用しちゃうの!!なまらシヨック!

開拓時代からいろんな言葉が混ざってるんだね

福島茨通り出身「米をうるかす」、「コミをなげる」って普通に使ってますよ。

それは、知っている「うるかす」とか、「なげる」って、意味、わかるかい?

ナゾの言葉

お菓子の名前?貸したがってる? あの人、ずいぶんかしがってるね。

かしがってる? あの人、ずいぶんかしがってるね。

かしがって、傾いてるって意味。



おながとこころのよりどころ

移住者お店探訪



2017年から2018年までの2年間にお送りしていた情報紙^{※1}から「に」移住者お店探訪」というページがありました。東日本大震災により北海道へ避難・移住され方々が営むお店を紹介するコーナーです。それから3〜4年がたち、移転したり、営業形態が変わったり、「いつか行こう」と思いつつ、お店の名前や場所がわからなくなってしまう、という方もいたり…。そこで今回は、新たな2つのお店のご紹介と、これまで掲載したお店の今の情報をご案内します。

ファームレストラン 菅野牧園



「飯館では和牛を育てています。お肉は加工品を作っていただいて販売したり、レストランなどに納めていましたが、冷凍食品としてコーストビーフを販売しても、解凍のしかたで美味しくなくなるし、牛肉は火入れが難しい食材です。だから、自分たちで美味しい状態のお

肉を提供したい、という思いはずっとありました」
菅野義樹さんは、



2014年に栗山町で「菅野牧園」として牛飼いを再開し、2018年10月に美枝子さんとファームレストランをはじめました。

「レストランには、いろんな方が来られます。福島市に避難した飯館の方が旅行で立ち寄ってくれたとき、帰りに『飯館の人と話せてよかった。ちよっとほっとしたわ』と言って、笑顔で帰られました。牧場だけだったら来ていないはずなので、レストランという空間が持つ可能性を感じました」

コロナ禍で休業が続く今ですが、菅野さん



はこう話してくれました。「震災によって大きな喪失を経験しました。でも、喪失のあと、自分の中に新たなものを取り込める、チャレンジできることも経験しました。今回の休業も、そうあるように考え続けたいです」

かふえま「はんえぞりす亭」

江別市大麻駅北口から徒歩15分。住宅地の中にある大麻銀座商店街に、穴戸隆子さんのお店「えぞりす亭」があります。「ここで営業していた友人が



お店をやめることになったとき、無くしてしまうのはもったいない、と思いましたが、地域に馴染んでいたし、避難して

きた方々の拠り所のようにもなっていたので」

2019年4月にオープンし、週4日、ランチやデザートを提供。取材にうかがったのは平日の13時半ごろでしたが、店内のテーブル席では老若男女、ご近所の方々がゆったりとランチ中で

した。

「食べものってすごいと思います。ふっつにご飯食べて『おいしいね』って、それでおかいっばいになったら、大抵なんとかなる。美味しいものは人を笑顔にします」



そんな穴戸さんのつくる口替わりのランチプレートは、「世界各国の家庭料理」。そのレパートリーの豊富さに驚きます。



「気軽にごはんでもデザートでも食べにきて、休んでいってください。もし、何かあったら煮詰まる前に外に出て、誰かに話すと楽になるし、ひとりじゃないから」と、穴戸さんは最後に話してくれました。

※1 北海道「道内避難者心のケア事業」を受託していた北海道広域避難者アシスト協会(解散)が発行。からから2017年発行 vol.2の「移住者お店探訪」に掲載の「Cafe もりのすみか」



寄稿 / ページのたより

私の父は、がん治療で自宅養生しながらの生活を送っていた。震災前はそんな父のそばで、母とともに自営業を営み、予約表を見ながら家族との時間を調整したり、顔なじみのお客さんとの会話がある充実した日常。そばにいた小さな孫たちと遊んだり食事をする父の様子は、床（とこ）に臥せることなく、このまま治ってくれるんじゃないか、と思わせるような穏やかな暮らしだった。

しかし、2011年3月11日、東日本大震災がおき、隣接県では原子力発電所の事故。私は幼い子どもたちのリスクを少しでも減らそうと、関東からの「避難」を決意。4日後、闘病中の父と離れる生活を選択した。胸がはちきれそうになるほど痛かった。

「避難」とは災難を避けること。今でもその場の危険から身を守るための必要な行動だと思っている。でも、幼い時から親しくしていた親戚の解釈は違った。「あいつは避難民。親をおいて逃げた」と後ろ指をさされたとき、「そこに応援者はもういない」と諦めた。避難した当初の部屋は、新聞紙をカーテンがわりに貼り付けただけのガランとした部屋。ひと月前までが嘘のよう。テレビ

だって、布団だって、子どものおやつだって、オムツもたくさんあったのに。気づけば自分は無職。避難民と呼ばれ、くやしくて、かなしくて、なさげなくて。

さらに、生まれ育ちが関東の私にとって、北国の冬の厳しさ、雪国の暮らしなんてものはまったくの無知。ストーブの「FF」の意味がわからず、50L以上も入る灯油タンクを自宅に用意することに戸惑う。勝手の解らぬ道民1年生。雪の上を走る子どもたちの環境適応に親として感動したが、自分はいまだに雪の上は走れない。こんな大人で役に立つのか？ 本当にどうにも頼りない父親だ、と情けなくなりながらも、子どもたちが落ち着ける生活を、という思いだけが自分を支えた。第二の故郷づくりのため、まずは職業訓

練校に通いながら、家族の衣食住を整えることに専念した。いろいろ動いてチャレンジを重ねる中で、いろんな人と出会い、サポートもいただき、少しずつ自分自身の存在と日常をとり戻しつつあった。

避難から数年後のそんな矢先、病気が進行し、父は他界してしまっただ。避難先から親に対して何もできなかった自分。避難せず、みんなで暮らしていたら状況も変わっていたのかな、と思う自責の日々。それでも応援してくれていた父に感謝を込めて、だからこそ明るく生きていかなきゃと自分の心を奮い立たせる。常にブレーキとアクセルが連続の日々。

令和の時代に入り、自分ももうすぐ50代。高齢化していく母。我が子はすでに北海道での生活が定着して

いる。父の墓を避難元に戻って建てたところで、子どもにとってはなじみもなければ、墓参りも行きにくい。そこにきて新型コロナの影響もあり、簡単には前の生活に戻れない。いまだ悩みは解決しない。むしろ複合的な課題が増えているような気がする。

10年間の頑張りも何か虚しさを感じるが、それでも生きぬくことは決してあきらめたことはない。災害によって生活の中に生じるさまざまな出来事への理解が少しでも世間に伝わるよう努力したり、日々チャレンジをやめないことが、残された息子として、10年経ってもいまだ頼りない父親としての役目だと。

(ペンネーム みそしる)

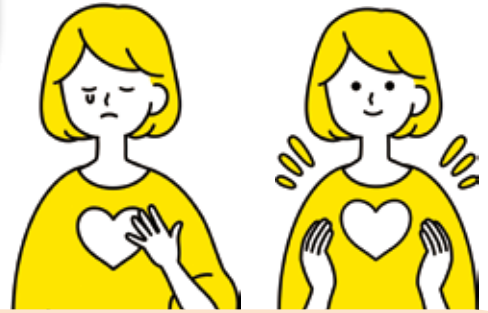


ここから これから からから相談

相談先のない相談

ふとこみあげる寂しさや、やり場のない思いを感じる時に

わからないことがありましたら、お気軽に北海道NPOサポートセンターにお問い合わせください！



「悩みではないのだけど、この先も、この気持ちとつきあい続けるのだろうか…と思うことがある」と、話してくれた方がいました。

生活していて困りごとはないし、友人もいて仕事もして、日々忙しくしている。楽しいこともいっぱいある。ただ、たまにふと、悲しい気持ちがおしよせて、涙が出てくる。『なんで、ここにいるのだろう』と、被災して避難した時のつらいこと、嫌な経験をした時の感情がこみあげて、涙が出てくる。

セラピストやカウンセラーは、話は聞いてくれて、受け止めてくれるので、相談した後しばらくはおちつく。でも、根本的な何かが解決する、ということではないから、自分はずっと、そういう気持ちとつきあい、いっしょに生きていくのだろうか、と思っているし、そう覚悟している。

田舎だったら、小さな時からの友人知人がいるけれ

どこにはいない、とか、もう帰る家がないんだ、ということはわかっているのに、ふと、虚しくなる。子どもが巣立ち、自分が歳を重ねていくことへの不安や寂しさなのかもしれない、とも思う。

吐露する場所があるといいのかもしれない。でも、同郷の人たちと集まって、同じような思いを語り合い、泣きながら話す、という時期はもうすぎたようにも感じていて、そういう場があったとしても多分、行かないと思う。

毎日予定を入れて忙しくしているのは、そういう気持ちになる時間を作らないためだと自分でもわかっている。気持ちに潰されないように、一生懸命動いている。

こんな思いを抱えている心に、一冊の本がよりそってくれるかもしれません。今回は、5冊の本をご紹介します。

※本は、心の薬といわれますが、時に合わないこともあります。読みはじめてあまりに辛く感じたら、迷わず読書を中断してください。選書：一般社団法人北海道ブックシェアリング代表理事 荒井宏明



『なくなりそうな世界のことば』

吉岡 乾 (著)、西淑 (イラスト) ■創元社 (2017/8/22)
世界のなくなりそうな言語の中から、それぞれひとつの言葉を紹介しています。どんな人がどんな思いで使っている言葉なのか。この言葉が消えたとき、それらに込められてきた思いはどこに行くのだろう。儚さと切なさが胸い交ぜになった優しい気持ちにさせてくれる一冊です。



『はかれないものはかる』

工藤 あゆみ (著) ■青幻舎 (2018/5/15)
はかれないものは、はからなくてもいいんだけど、はかってみようか。もっと好きになりたいから？ もっと近づきたいから？ 日本語、イタリア語、英語で書かれた49の詩が、気持ちにすっと染み透る絵を伴って語りかけてきます。最後は作者が若き日の自分を発見します。



『思わず考えちゃう』

ヨシタケ シンスケ (著) ■新潮社 (2019/3/29)
思いつめちゃうのは心に良くないけど、考えすぎちゃうとどうなるんだろう。クスッと笑える結論にたどり着いて、心が軽くなったりして。観察と思索の達人の著者が、人間って、社会って、生きるってなんだろう？と、まじめに深く考え、素直に淡々と語ってくれます。



『虹いろ図書館のへびおとこ』

櫻井 とりお (著) ■河出書房新社 (2019/11/20)
つらいこと、悲しいことは、わたしたちから何を奪い、何を与えるのか。つらく悲しい思いを持っているのに、与えることができる人に、どうしたらなるのか。心が固まりかけた小学6年の火村ほのか。その世界がおんぼろ図書館のみどり色の司書との出会いで動き始めます。



『禅ってなんだろう？』

石井 清純 (著) ■平凡社 (2020/3/21)
「中学生には難しすぎない？」といわれる「中学生の質問箱シリーズ」のひとつで、大人が読んでも「手ごたえあり」の一冊です。堅苦しい口調ではなく、基本知識や現代の禅のあり方、所作など、幅広くかつ実践的に、混迷の時代の坐り方を導いてくれます。

表紙写真／～空知～福島の風景に似て…



【空知の田んぼ】
「田んぼが見たいなあ」と夫が言うので、よく長沼の方にドライブに行ったんですよ。あの辺りは、福島の景色に似ているところがあってね」と話してくれた方がいます。以来、空知の田園地域に行くと、その話を思い出すようになりました。暑かった今年、稲の生育はいつもより早く、今年は新米が早めにいただけるかもしれません。



【菅野牧園】(上)
菅野牧園は、田園地域から少し丘をのぼったところにあります。車から降りて見渡す風景に、思わず深呼吸をしたくなります。



【えぞりす亭】(下)
えぞりす亭は、江別市大麻で約50年の歴史がある「大麻銀座商店街」にあります。取材に伺った日も、地域の方々ランチタイムをゆったり過ごしていました。(各P4-5に掲載)

北海道における被災避難者の受入状況 [2021年8月11日現在]

※北海道のホームページでもご覧になることができます。



単位：人

		岩手県	宮城県	福島県	その他	合計
空知	岩見沢市	1	3	8	0	12
	他8市町村	0	2	20	0	22
石狩	札幌市	16	170	479	105	770
	江別市	6	9	23	0	38
	千歳市	0	6	9	0	15
	恵庭市	0	0	25	0	25
	北広島市	0	2	13	0	15
	他2市町村	0	1	6	0	7
後志	小樽市	0	4	16	9	29
	他4市町村	0	2	9	0	11
胆振	苫小牧市	4	17	9	0	30
	他5市町村	0	7	17	0	24
日高	2市町村	0	0	3	4	7
渡島	函館市	5	25	68	8	106
	北斗市	0	4	13	0	17
	1市町村	0	0	6	0	6
檜山	1市町村	0	3	0	0	3
上川	旭川市	9	26	49	9	93
	他6市町村	0	4	11	7	22
宗谷	1市町村	1	0	0	1	2
オホーツク	北見市	0	1	11	0	12
	他4市町村	0	4	7	0	11
十勝	帯広市	4	3	19	3	29
	他1市町村	0	0	1	0	1
釧路	2市町村	2	0	3	0	5
根室	1市町村	0	2	0	0	2
総計	51市町村	48	295	825	146	1,314

避難者相談窓口

TEL 011・200・0973

NPO法人 北海道NPOサポートセンター

平日 10:00~17:00
FAX 011・200・0974
info@hnposc.net

〒064-0808
札幌市中央区南8条西2丁目5-74
市民活動プラザ星園 201

地下鉄東豊線「豊水すすきの駅」
6番出口から徒歩約7分
地下鉄南北線「中島公園駅」
1番出口から徒歩約5分

全国避難者情報システム「ふるさとネット」の登録について

「からから便り」は「ふるさとネット」の登録情報をもとに発送しています。「ふるさとネット」は北海道が運用する被災避難者サポート登録制度です。この制度は自治体の転出入届とは連動しておらず、転居の場合は住所変更のご連絡をいただかなければ、郵送物が「所在不明」として返送されてしまいます。転居、登録解除など、「ふるさとネット」の登録内容に変更がある場合はご連絡ください。

■連絡先

- ① NPO 法人 北海道 NPO サポートセンター
- ② 北海道総合政策部地域創生局地域政策課
電話：011-206-6404
メール：shienhonbu@pref.hokkaido.lg.jp
- ③ 避難先市町村の担当窓口（市町村により部署が異なります）

編集後記

あっという間に夏が過ぎ、寒い日が増えてきました。暑さが少し恋しくもなりますが、まちが色づく紅葉も待ち遠しいものです。

今回のからから便りは「言葉にできない気持ち」を取り上げています。「やり場のない思い」を感じる時におすすめの本も紹介しています。読書の秋に読んでみてはいかがでしょうか。気温の急激な変化のある日々が続いています。お体に気を付けてお過ごしください。
(定森)

からから便り Vol.2 ■ 2021年9月15日発行
発行：NPO法人 北海道 NPO サポートセンター
〒064-0808 札幌市中央区南8条西2丁目5-74 市民活動プラザ星園 201
電話：011-200-0973 FAX：011-200-0974 メール：info@hnposc.net
委託元：北海道
※東日本大震災により北海道へ避難されている方で、情報紙の送付を希望される方は北海道 NPO サポートセンターまでご一報下さい。

お預かりした個人情報は、避難者の生活支援のために利用するほか、出身県への提供など限定した目的のみ利用し、その他目的には一切利用いたしません。

【無断転載・コピー】

本紙掲載の写真・図版・記事などを許可なく無断で転載することを禁じます。